特定非営利活動法人リカバリー
2023年度事業報告

１.法人全体の概況

- 2023年5月に新型コロナウイルスが感染症5類へ移行後も、スタッフと利用者に感染者が出た。しかしながら症状なし、または軽症で推移し、大きな混乱はなく経過した。
- 2019年より法務省から事業委託されていた「女子刑務所モデル事業」、また厚生労働省による「依存症民間団体支援助成事業」、さらに2021年から継続してきた年賀はがき助成金を活用した「困窮女性に対する食品(お弁当）配布事業：女性支援グループCloudyとの協働事業」はいずれも2024年3月をもって終了した。なおCloudyとの協働事業は、年賀はがき助成金における好事例事業として2024年度中に広報誌にて紹介される予定である。
- 職員体制については、2023年4月に１名の常勤専門職を雇用した。しかし試用期間終了の時点で法人の求める援助スキルに満たないことを踏まえ、継続に至らなかった。また厚生労働省による助成金事業に従事する非常勤職員を2023年5月に新たに雇用し、契約満了後の2024年5月、常勤として雇用した。
- 法人の2023度決算は60万円ほどの黒字で終了した。

2.トラヴァイユそれいゆ

＜2023年度利用人数の動向＞

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	平均
登録人数	2023	19	19	17	17	19	20	20	20	16	17	17	17	18.1
	2022	19	16	14	16	15	16	17	17	17	17	17	18	16.5
1日平均	2023	13.5	12.4	11.5	11.3	11.4	11.0	12.1	11.8	13.3	12.6	12.6	13.6	12.3
	2022	10.9	11	10.5	10.8	12.1	10.5	10.8	10.8	11.9	12.2	12.6	14.2	11.5
延べ人数	2023	284	272	253	260	263	230	278	260	307	278	278	300	271.9
	2022	229	242	230	238	278	231	237	238	273	256	252	327	252.5

＊2023年度の新規登録者は、7名（前年度8名）。7名のうち再登録者（当事業所に通所歴あり）は、3名。
＊紹介経路については、全国各地の精神科医療機関、矯正施設（モデル事業関連）、相談支援事業所である。

＊新型コロナの行動制限が緩やかになってから、札幌市近郊に問わず、全国の関係機関や家族から、相談や見学などの問い合わせが前年度に比べて増加する傾向が見られた。

トラヴァイユそれいゆ

＊利用契約が終結した利用者は、8名（前年度5名）。一般就労した者が1名、他の障害福祉サービスに移行した者が1名、地元へ戻った者が3名、通所が途絶え終了した者が2名、長期入院のため契約終了した者が１名であった。登録人数、1日平均、延べ人数ともに前年度に比べて微増した。

＊利用者の障害種別は大きく変わらず、依存症や複雑性PTSDなどの精神障がい、発達障がいとその他精神疾患を重複するもの、知的障がいとその他精神疾患を重複するものに分類される。依存症では、依存対象として処方薬や市販薬が増加傾向にある。

＊利用者の年齢は、10代から70代と幅広い。各ライフステージにおける困難や課題を抱えている者が、トラヴァイユ・それいゆを一つの居場所として利用している。各自のニーズに合わせ、“オーダーメイド”な支援を展開しているが、異世代との交流や共存ができるといった点も特徴である。また利用者の年代に合わせ、就労訓練だけでなく、本人が役割を持って社会に参加できるような環境を整えられるよう意識している。

＊新規利用者の獲得は引き続き、大きな課題である。トラヴァイユ・それいゆの訓練等給付費は法人の運営にとっても、その役割が大きいこともあり、新規利用者の獲得と安定した通所を確保することは2024年度も課題である。さっぽろ障がい者プラン2024によると、札幌市内で就労継続支援A型事業所が100カ所以上、就労継続支援B型が500か所以上（当事業所がある東区には90カ所）あり、今も増加傾向にあって競争が激化している。

トラヴァイユそれいゆ

＜女性利用者の特徴＞

＊処方薬（30代）や市販薬（10～20代）の使用に関する困難を抱えた利用者が増加傾向にある。新規利用者と数年単位で通所している者が混在していた。40~50代で数年単位通所している利用者は、年齢や障害特性などさまざまな要因から、他事業所や一般就労することが困難である者が多い。そのため、トラヴァイユ・それいゆに通所するモチベーションを保つことや居る意味を見失う傾向がみられ、どのように支援を展開していくかが課題となっている。

＜男性利用者の特徴＞

＊2023年度は新規利用者が1名増え、4名が利用している。障害としては発達障害２、統合失調症１、薬物依存症１であり、20代が3名、50代が１名の構成である。

＊20代の3名は、特性は異なるが対人コミュニケーションが苦手なのは共通している。春～秋は、畑作業を中心に活動し、冬季間は就労に関するコラムなど教材を使用して、言語系グループワークを実施した。徐々に、自身の考えや思いなどを言語化できるようになり、何を考えながらここで就労訓練を受けているか、就労に関する価値観をお互いに共有することで、他者理解や就労へのモチベーションをあげることに役立った。

トラヴァイユそれいゆにおける工賃

	2023年度	2022年度	2021年度
支給工賃総額	2,682,430円	2,738,344円	2,217,893円
前年度比	55,914円減	520,451円増	35,030円減
平均工賃月額	18,174円	17,222円	12,128円
前年度比	952円増	5,094円増	1,774円増
平均工賃時給額	320円	395円	294円
前年度比	75円減	101円増	17円増

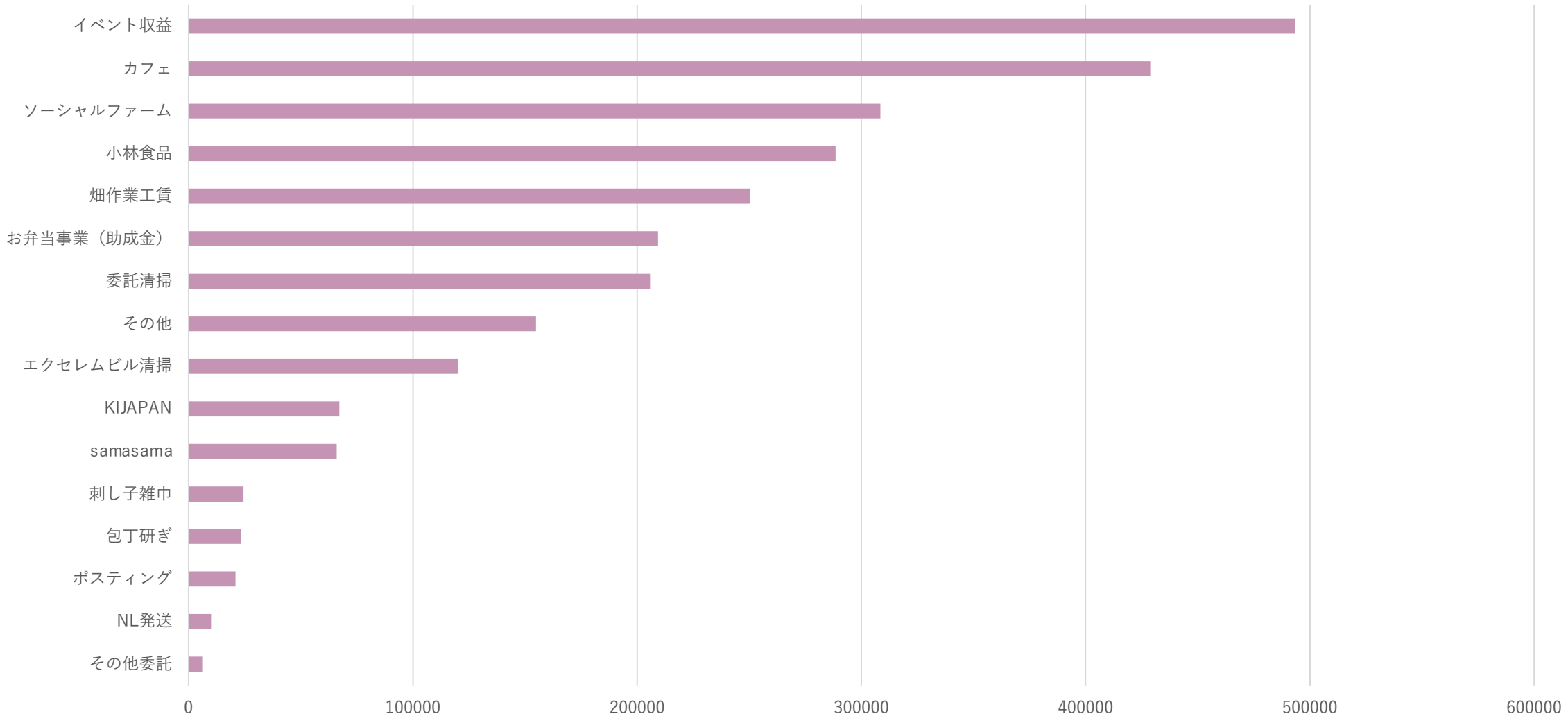
＊2023年度のトラヴァイユ・それいゆの工賃の実績は、年間の工賃の平均支給額が1万5千円を達成することができ、2024年度も昨年度と同等の基本報酬のランクで算定することが可能となった。

＊大きな収入源はカフェ事業およびソーシャルファーム（畑、野菜販売など）事業である。

＊委託作業では、施設外就労を実施した小林食品が大きな収入源になっている。

＊支給工賃総額および平均工賃時給額が減少しているのにもかかわらず、平均工賃月額が増額しているのは、2024年度の制度改正において、平均工賃月額の算出方法が変更となったことによるものである。

2023年度　作業別収支



トラヴァイユそれいゆ

＜委託作業の位置付け＞

＊昨年度に引き続き、「小林食品」から委託されている乾物（こんぶやのり）の計量・封入・パッケージの作業、「株式会社ケーアイジャパン」から委託されているフェイクグリーンの苔つけ作業がメインの作業となっており、そのほか、北海道ワインから季節ごとにDM発送の作業を依頼され行っている。また、法人のニュースレター発送、厚生労働省助成金事業における報告書の発送も、作業としてトラヴァイユそれいゆに委託している。例年に比べ、委託作業の種類を絞り効率化に努めた。

＊委託作業は個々の収入は少額であるが、これらをコンスタントにこなし積算させることで、作業収入全体の増加につなげていくことが出来るという側面がある。

＊基本的にそれぞれの作業は、少人数のグループで行っている。利用者の障害特性に合わせ、マイペースに行うことを出来る限り受け入れるといった配慮をし、利用者個別の状況にマッチングするよう、担当するスタッフが作業メニューを組み立てながら実施する必要がある。

＊冬期間ははたけ作業がなくなるため、委託作業が中心となる。言語を使った心理教育的プログラムや、非言語系のアートセラピーを用いたワークショップなどと併せ、利用者の抱える課題にゆっくりと取り組むためにも委託作業のようなパターン化された単純な作業は、法人の支援にとって重要なものとなっている。

トラヴァイユそれいゆ：カフェ部門

＊2023年度のカフェはコロナの影響で縮小していたリアルでの各種イベントや研修が復活したことにより大口のお弁当やオードブルの注文が2022年度より大幅に増収となった。カフェそれいゆは通常のお弁当から松花堂弁当、レセプション用のオードブルなどイベントの内容に合わせて多様なメニューに対応できること、100食ほどの大量の注文にも対応できることが強みとなっている。

＊特に夏期間は、ソーシャルファーム部門と連携し、収穫した野菜を調理しデリカとして販売するなどしてカフェの収入増加に大きく貢献した。

＊8月にＪＷＬＩ(Japanese Women Leadership Initiative) による「Boot Camp Sapporo」(北海道で活動する女性リーダーに対する研修)がNPO法人リカバリーと札幌市男女共同参画センターの共催で開催された。３日間におよぶ参加者と講師研修の食事、研修中のコーヒーやスイーツの提供をリカバリーのカフェ部門で担当したが、会場であるエルプラザ調理室を中心に、スタッフとメンバー延べ１５人の体制でこれに臨んだ。

＊2020年よりカフェ店内での飲食提供を止めていたが、新型コロナウイルス感染の収束が見えてきたことから、これまでトラヴァイユ・それいゆの従たる事業所として2014年以降東区にて営業してきたカフェを、2024年度は同じエクセレムビル2階(元相談室それいゆ)へ移転する計画である。

トラヴァイユそれいゆ：ソーシャルファーム部門

2023年度売り上げ

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
収入	就労支援事業収益	3350	2700	22100	123077	264516	138950	120879	31179	107174	6900	400	100	
	①社内販売		1000	12200	43337	113976	55790	42049	31179	25904	6600	400	100	
	②外販		1700	9900	79740	150540	83160	78830	0	81270	300			
支出	就労支援事業費	0	1240	6446	62353	122170	199329	166854	127463	13400	100	0	330	
純利益		3350	1460	15654	60724	142346	-60379	-45975	-96284	93774	6800	400	-230	121640
												未収金（法人）		172172
												純利益計		293812

上記①の社内販売には、カフェそれいゆでの材料代、RHでの夕食代が含まれている。
上記②の外販先は、大福屋ひかりでの定期販売、精神科医療機関をはじめとした関係機関でのマルシェ、町内会のお祭りなどのイベントである。なお就労支援事業費には種子代は含まれず、野菜の仕入れ料金、外販の際のパッケージ代、マルシェ材料費、作業時の必要物品/消耗品などである。

2023年度外販の実績について

	6月	7月	8月	9月	10月	11月
外販先	元気ショップ 旭山病院 札幌トロイカ病院 札幌保護観察所 大福屋ひかり	ひかり感謝祭 元気ショップ それいゆマルシェ 旭山病院 桑園病院 株式会社FUJI 札幌保護観察所 大福屋ひかり	札幌ひばりが丘病院夏祭り 新道東町内会まつり 大福屋ひかり 旭山病院 桑園病院 札幌保護観察所 札幌こころのセンター 啓生会病院 さっぽろ香雪病院 相談室ノック 大谷地病院 大福屋ひかり	それいゆマルシェ 旭山病院 桑園病院 大福屋ひかり	株式会社FUJI 旭山病院 札幌保護観察所 さっぽろ香雪病院 大福屋ひかり	札幌保護観察所 札幌こころのセンター 旭山病院 就労支援センターソエル

ソーシャルファーム部門の課題

＊野菜の収穫時期を推測するのが難しく、イベント以外の販売については計画が立てらないことが多かった。結果として関係のある知人や機関を頼る傾向があったことは否めない。また時期を逸し収穫しきれず廃棄してしまう野菜があった。

＊農業に関する技術指導について課題を実感した。現在は男性スタッフに過重な負担があること、連携するファームのオーナーもまた農業専従者ではないことから、今後は技術指導について検討していく必要がある。

＊以上の反省点から来季は、販売が可能な関係機関へ事前に打診すると同時に、野菜の収穫時期を逃さずにスケジュール管理を徹底することが必要となる。また関係機関ごとに窓口が異なるので、販路拡大にはこうした窓口担当者とのこまめな連絡を実施する。

＊常勤スタッフ３名が週に３回以上畑作業に従事するなかで、ファームのオーナーとより緊密な連絡をおこなう。また畑作業に関わるスタッフ内での役割に関して、特定の人に負担が集中しない組織づくりに努める。

＊ファームのオーナーは障害福祉の専門家ではないため、利用者の特性を生かして無理のない農作業を実施するのは専門職スタッフの役割となる。ファームの売り上げを伸ばして販路を拡大する目標と、カフェと連動させて安全な食の提供を実施するという二つの目標の達成にむけた組織づくりが課題となる。

リカバリーハウスそれいゆ

2023年度入所者数の推移

R5 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	R5 1月	2月	3月	延べ数	平人月均数
6	6	5	5	6	6	6	6	6	7	5	5	69	5.75

＊入所者数５名(うち3名は薬物依存症と他の精神疾患との重複障害、１名は発達障害と他の精神疾患との重複障害、1名は窃盗症)である。またこのうち２名が地域移行特別支援加算対象である。
＊退所者は4名で、その転帰は家族同居、単身生活、他のGH入所、自立訓練施設への入所である。
＊年齢も精神疾患に至る背景、また病状や生活するうえでの障害がますます多様化していくなかで共同生活型GHを入居者にとって安全な場として運営していくことは、グループワークの要素も多い。
＊外出が困難な入居者がGHにて委託作業をおこなうこともあり、生活空間と作業空間の区分けに配慮が必要となった。
＊依存症を抱える入居者については再使用することもあり、救急車要請や緊急対応など、スタッフの負担は大きい。しかし使用しながらであっても、入所者にとってより傷つきを減らすための支援を優先させ、生活の安定を目指す。
＊入所者のほとんどが暴力被害を背景にもつ、また重複障害を抱えるという傾向に変化はない。

相談室それいゆ

2023年度の相談実績

2023年度契約者	計画相談	モニタリング数
64名	52件	184件
＊うち新規相談契約者は10名		前年度比 ➕41件

＊モニタリング数の増加要因としては、障害福祉サービスのプラン変更、および毎月モニタリング実施によるものと思われる。
＊2022年度に申請した「精神障害者支援体制加算」は、2024年の報酬改定により今年度で終了した。
＊「地域移行支援」について今年度も実績はなかった。一方で来年度早々から「地域定着支援」を契約する予定の対象者がいる。

＜今後の課題について＞
＊契約者の状況により突発的な動きが発生した場合、職員のスケジュールが変動的となり、併設している自立生活援助を同時に担うこともあって、他の契約者への関わりが不十分となることである。
＊そもそも制度として“どこまでが相談支援事業所の業務なのか”が曖昧である。さらに「委託相談支援事業所」との線引きも明確になっておらず、依然として相談室の事業収入だけで相談室を維持していくのが困難という現状である。
以上を踏まえ、兼務の多い状況下で時間を確保し、積極的な支援をどう展開していくか考える必要がある。

＊従来の病院からの計画相談依頼に加え、「訪問看護事業所」や「就労継続支援B型」からの依頼も増加してきた傾向がみられる。来年度も、連携機関とのつながりを大切にし、一人ひとりの支援を丁寧に行っていくことが、当相談室の今後の展開にも繋がっていくものと考える。

自立生活援助：リビングサポートそれいゆ

＊2023年度は、新規契約者が2名、継続契約者が5名であり、合計数は7名（前年度+1）である。年度末時には、5名が終了に至る。一月当たりの平均利用者数は約4名（前年比-1）であり、2023年度の請求件数は月平均87,572円（前年比-8,329）、一人当たりの月平均は21,893円（前年比+544）である。

＊新規利用者2名のうち、１名は共同生活援助を退居し単身生活を始めたもの、ほか１名は初めての単身生活を始めたものであるが、いずれも対人関係含んだ生活スキル獲得の困難さから、単身生活の継続が難しく契約終了となる。一方で、それぞれの利用者が抱える課題を利用者や関係機関と共有し、本人の意向を随時確認しながら一人ひとりの力を高める支援を行った結果、自立度が上がり、「安心、安全な住居の確保」と就労継続支援B型を通じて「仕事」という社会の中での役割を獲得し、3名が終了に至る。このことは一定の成果と言える。

＜今後の課題＞

＊定期的な訪問と契約者の状態（特に不調時）に合わせた随時訪問、緊急時支援の柔軟性が求められる。

＊契約者と支援者が相互に想定する“緊急性”に相違があるのですり合わせが必要である。

＊現在は法人が運営するグループホームを退去後にサービスの利用開始となるのが定型となっている。今後は精神科医療機関の退院予定者やニーズを抱えながら地域生活を営む単身障害者へ制度を周知することが必要。

札幌刑務所所(女子刑務所)モデル事業

＊法人は昨年度と同様に，公には「刑務所職員に対するスーパーヴィジョン」を５年間実施する【本体契約】のみ事業を実施した。具体的には塀のなかのプログラムを実施する刑務所職員に対するスーパーヴィジョン（平均6～７日／月）で、2023年度は大嶋と東谷の２名体制でこれにあたった。

＊いっぽう社会復帰支援コーディネイト業務は、2023年度も入札出来ずに終わった。しかしモデル事業初年度対象者全員（計9名（道内4名，関東圏域5名））の支援やつながりは継続しており、うち１名は現在もリカバリーハウスそれいゆに入所中である。それ以外にも、本体契約の事業内において関わった対象者が出所後に希望する場合には、支援を実施している。

＊モデル事業は2024年3月をもって終了した。なお、2024年度の社会復帰支援コーディネイト事業に関しては、契約期間が５年間と長期化したことで法人はこれに入札する資格がないため入札に参加出来なかった。社会復帰支援コーディネイト事業に関しては、2023年に支援者から対象者に対する性暴力が露見した。重大な事案が発生したにもかかわらず、十分に情報が開示されないままである。また、出所後の生活支援がこのモデル事業では非常に重要であるが、法人と矯正局との認識の隔たりは最後まで埋まらないままであった。

＊モデル事業対象者の多くは、自分が抱える困難さを認識するのに時間を要する。また出所後に再使用の引き金となりやすい生活環境についてこちらからは改善を提示するが、変更を望まない対象者がほとんどであった。

厚生労働省：依存症民間団体支援事業

＊厚生労働省が実施している「依存症民間団体支援事業」の一環として「Women Centered Careを学ぶ：2022年度女性依存症者に特化した全国支援者研修」を申請し５年連続で採択された。内容は以下の通りである。なお事業終了後に報告書を作成し、全国の依存症拠点病院、都道府県立精神保健福祉センターなどに頒布した。

実施日	研修テーマ	講師および研修場所
2023.9.8~9　対面 (参加者9名)	重複障害女性への就労支援を学ぶ」 ・「就労支援継続B型事業所における援助の実際」就労アセスメント・就労準備の特徴・就労定着における課題の把握 ・座学と体験型実習(法人が取り組む就労支援場面：農福連携事業・カフェ事業) ・身体的セルフケアの実際(ソマティクスの理論を学ぶ－座学とソマティクス体験)	大嶋栄子(NPO法人リカバリー代表／札幌) 平澤昌子(ハナ・ソマティクス・エヂュケイター／公認心理師／臨床心理士／札幌) トラヴァイユ・それいゆ ファーマーズガーデン・びとえ（石狩郡当別町）
2023.11.8　オンライン (参加者57名)	当事者から学ぶ－就労を通して社会へ戻る＆アディクションからの回復」 ・女性依存症当事者にゲストスピーカーを依頼。 ・当事者の体験を通して、支援のポイントを学ぶ。	大嶋栄子(NPO法人リカバリー代表／札幌) 女性依存症当事者 ゆきえさん、めいさん、まるこさん
2024.1.20　オンライン (参加者71名)	困難さが重複する女性依存症者の支援をどう組み立てるか」・講義＋トークセッション＋質疑応答 ・若年者の市販薬使用における現状と課題	松本俊彦（国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部部長） 大嶋栄子(NPO法人リカバリー代表／札幌)

その他

＊毎年3月21日に実施している「それいゆまつり」は、カフェの移転工事終了に合わせての開催(6/15)となり延期した。

＊ニュースレター発行に関して、2023年12月、2024年2月、2024年3月の３回発行した。WEB版としてHPに掲載するほか、希望する賛助会員および関係機関には印刷して郵送を行なっている。

＊ECサイトでは主力商品を整理し更新したほか、2024年３月には「カフェ移転応援寄付」を新設した。なお賛助会員数はほぼ横ばい状態であり、寄付額も年々減少傾向にある。法人の活動をどのように周知し、また賛同者を得るのかについて、今後は法人外のアドバイザーにアプローチし積極的に助言を求める必要がある。

＊カフェそれいゆのエクセレムビル2階への移転工事に関しては、北海道社会福祉協議会が募集していた改築費用助成に応募し、それを充てたいと考えていたが採択には至らなかった。その後、ビル貸主である(株)GREEの藤沢社長より、予定通り工事を実施しその費用に関しては立替金として(株)GREEが支払うと申し出があった。なお2024年度に入り返済に関する契約書を法人と(株)GREEとの間で取り交わす予定となっている。

＊2023年度は他の事業を遂行するために多くの時間を要したため、法人単独の収益事業を実施することが出来なかった。